

## 柳井浩先生の思い出

小澤 正典 (元慶應義塾大学工学部講師) 柳井浩君 (元慶應義塾大学工学部講師)



慶應義塾大学名誉教授 柳井浩君  
二〇二一年十一月二十五日逝去  
享年八十四

私が管理工学科の学部生だった時、ドイツに留学をされていた柳井浩先生が帰っていらつしやるといので、羽田空港に修士課程の先輩と一緒に迎えに行きました。飛行場で火災があり飛行機の到着が遅れましたが、これが柳井先生に初めてお目にかかった時でした。それ以降、私が塾の学生として、また同じ管理工学科のスタッフとして勤めている間、熱心に「ご指導・ご鞭撻を下さり感謝の言葉もありません。

その留学は先生がハンブルク大学のクラッツ先生の下で、数値解析の研究を二年間されたものでした。この留学の影響か先生の方が、少しドイツ流になっているように感じました。帰国後は、ばらばらに数値解析の研究もなさっていました。その後はオペレーションズ・リサーチ(OR)の研究が主となりました。数値解析やORの分野では、数学的な理解が必要ですが、先生は図に書いて理解する指導をされ、この「図をもって語らせる」は先生にとって非常に重要な哲学でした。

大学での昼を挟んでの輪講(ゼミ)では、ときどき昼食会を開いて、自ら簡単なスープを作って振る舞って下さりました。いつも発表の準備は大変でしたが、その食事が楽しみでもあり、先生の人柄を知るよい機会でもありました。その際には、先生が幼稚舎生の時に千葉に疎開なさり、厳しかつたけれど結構楽しんで過ごしたこと、などにも触れておられました。先生は体格もよく、ハイキ

ングや遠足がお好きで、学生や留学生を、秩父や鎌倉などに連れ行き、帰りに一杯飲むことも楽しんでおられました。その後、腰椎ヘルニアで手術をしてからは、頻繁には行けなくなったことが残念なご様子でした。

先生は工学に対して「工学はものを作るだけでなく、その説明をきちんとできないといけない」といつもおっしゃっていて、ORの研究においては、問題の定義やモデル化、解析を観点にした問題の解決について研究をされていました。また、公益財団法人日本グローバル・インフラストラクチャー研究財団との協力の下に三〇年にわたってOR学会の研究部会を主導し、学問による社会貢献と若手の研究者の育成に多大な貢献をされました。

先生は、文章を書くのが非常に上手でOR学会の機関誌の編集長をなさった時は、「からくり堂主人」と称して小さなコラムで社会的な問題の数理的な側面の説明を毎号書かれていて、それを読むのが楽しみでした。そして、福澤先生の研究会にもご参加されていて、福澤先生のいろいろなお話を聞く機会も設けていただきました。

退職後は翻訳本の出版に注力なさり、黄金比や左右対称の現象の本を書かれています。これからは先生のご著書を読み、偲ぶことに致したいと思えます。先生の戒名は「慶峰院窮理浩覺居士」であり、先生にふさわしいお名前と存じます。

ここに心よりご冥福をお祈り致します。